

こころのはな



6年生「ぼくたちの学校」 ～学校を愛する心～

『ぼくたちの学校』は、東日本大震災で学校を失った子どもたちのお話です。自分の学校が津波で流され、他の校舎にバスで通うことになった子どもたちは、大好きだった海を見ることもできなくなっていました。そこで、1年生の子が泣いてしまいます。なぐさめる主人公と周りで見ている子どもたち。そんな中、校長先生が話された「校舎が違ってみなさんが集まるところが永崎小学校です。」という言葉思い出し、バスの中でみんなで校歌を歌うことで、母校への愛着の意味を再確認するお話です。

社会の学習で震災の悲惨さを学習しましたが、実際に被害にあった子どもたちの話を聞いて、被災した人の感情を想像し、心を揺さぶられたようでした。校舎をのみこんでしまうほどの高波が来たこと、亡くなった友達、家がなくなって転校して会えなくなってしまった友達。今の生活との違いや、災害はいつ起こるか分からないという恐怖を感じたようでした。

授業では、バスの中で「ぼくたちのいるところが学校なら、このバスの中も学校だね。」と言われたときに、主人公はどんなことを考えたのかについて、道徳ノートに書きながら深く考えました。「この瞬間が当たり前ではなく、ありがたく幸せであると感じた。」「仲間がいるから場所が違って学校だと考えた。」「つらいけれどみんながいてよかったと考えた。」と、自分なりの表現を使って、主人公の気持ちに寄り添うことができました。



学習の振り返りから

今年度のコロナウイルスによる休校と重ねて考える児童もいたため、半年経った今の思いを振り返りに書いてもらいました。

- もっとみんなとの思い出を増やすためにも、全力でいろいろなことに取り組みたいです。
- コロナですっと会えなかった友達とやっと楽しく過ごせているのに、あと半年は早すぎます。今ある時間を大事にしていきたいです。
- 初めの3月から5月は心残りしかなかったです。でも今は何事にも全力で一つ一つの行事を大切に、絶対に心残りなく、逆にとてもいい思い出にしたいと思っています。